共感度の最低値1から最高値5までの幅があり、全対象者の平均値は4.193であった。非当事者の共感度の平均値は4.0、当事者の共感度の平均値は4.7であった。α=5%でt検定（両側検定）をした結果、t=−7.72, df=326.01 (unequal), p=.000（<α）で、2グループ間の差は統計的に有意であった。

また、項目Ⅳ. 7「子どもを養子にした産みの親は肩身の狭い思いをする」をみると（【表3】参照)、非当事者の46.8%が賛成し、それに比べて当事者の賛成者は13.8%とかなり低く、この差は有意水準1%で有意であった（χ^2=96.97, df=1, p=.000<α)。

【表3】肩身の狭い産みの親

	非当事者	当事者
はい	139人（46.8）	15人（13.8）
いいえ	158人（53.2）	94人（86.2）

（注）カッコ内の数値はグループ内の%。

B. 養子に対する共感度：

次に、非当事者と当事者両グループの、養子に対する共感度の4項目（Ⅲ.2.1, Ⅲ.2.2, Ⅲ.2.5, Ⅲ.2.6）の平均値を比較した。共感度には最低値1から最高値4までの幅があり、全対象者の平均値は3.7であった。非当事者の共感度の平均値は3.6、当事者の共感度の平均値は3.8であり、両グループとも共感度が高く、わずかではあるが当事者の共感度が非当事者の共感度より高かった。α=5%でt検定（両側検定）をした結果、t=−3.74, df=309.39 (unequal), p=.000（<α）で、2グループ間の差は統計的に有意であった。

C. 養親に対する共感度：

養親に対する共感度に関しては、項目Ⅳ.2「養子を迎えることに共感できる」をみると、当事者の99.1%に対し、非当事者の63.4%しか賛成しなかった（【表4】参照)。χ^2検定の結果（χ^2=53.71, df=1, p<.01)、2グループの差は統計的に有意であり、仮説の「両グループの共感度に差がある」が支持された。

【表4】養子を迎える養親に共感

	非当事者	当事者
はい	187人（62.3）	108人（99.1）
いいえ	113人（37.7）	1人（.9）

（注）カッコ内の数値はグループ内の%。

4. 養子縁組当事者間のコミュニケーション

まず、オープン度全般についての項目Ⅳ. 5「産みの親と育ての親と養子の三者間のコミュニケーションが保たれるべきだ」をみた（【表5】参照)。43.4%の非当事者が賛成しており、これは、76.1%の当事者が賛成しているのと比べて、かなり低いことがわかり、2グループ間の差は1%の有意水準で有意であった（χ^2=36.23, df=1, p=.000<α)。

【表5】当事者三者間のコミュニケーションを保つべきだ

	非当事者	当事者
はい	128人（43.4）	83人（76.1）
いいえ	167人（56.6）	26人（23.9）

（注）カッコ内の数値はグループ内の%。

次に、下記のA. B. C. 欄に示したように、質問項目（Ⅱ.2〜Ⅱ.6）で、当事者と非当事者が、どの程度の、養子縁組当事者（養親と産みの親と養子）間のオープン度（①クローズド、②セミオープン、③オープンアダプション）を好むかを比較した。

A. クローズドアダプション：

まず、クローズドアダプションへの共感度に関する項目Ⅱ.2を検討した（最低値1, 最高値5)。クローズドアダプションへの共感度の平均値は、それぞれ、非当事者が3.02、当事者が2.13であった。α=5%でt検定（両側検定）をした結果、t=7.57, df=413 (equal), p=.000（<α）で、2グループの差は統計的に有意であり、仮説「非当事者と当事者のクローズドアダプションに対する好感度に差がある」が支持された。

次に、他の二つのクローズドアダプションの質問項目—Ⅲ.1.7「（産みの親は）養子にして以来、子どもにも育ての親にも連絡をとっていないし、将来も連絡はとらないほうがよいと思う」とⅢ.3.6「（養親は）産みの親には子どものことに干渉